

# グレゴリオ・デ・セスペデスと文禄の役

谷口 智子 (愛知県立大学、日本)

私は、2013年に、グレゴリオ・デ・セスペデスについての研究書を翻訳しました(朴哲著、谷口智子訳、『グレゴリオ・デ・セスペデス—スペイン人宣教師が見た朝鮮と文禄・慶長の役』、春風社、2013年)。著者の朴先生は、韓国外国語大学の総長で(当時)、韓国で最も著名なスペイン文学者の一人です。この本は、彼がマドリッド大学に提出した博士論文が出版されたものです。スペイン語と韓国語版が出ていまして、私はスペイン語版から、直接日本語訳しました(韓国語版も参照しています)。今日の発表は、朴先生のセスペデス研究の紹介をしながら、いくつかの問いに答えていく形で行おうと思います。

## 1、セスペデスとは誰か？

グレゴリオ・デ・セスペデスは、初めて朝鮮半島を訪れたヨーロッパ人宣教師で、日本で布教していたスペイン人イエズス会士であります。1552年、マドリッド生まれのスペイン人。1569年イエズス会に入会、1571年サラマンカからインドに渡り哲学と神学を学びました。1575年ゴアで司祭となり、1577年渡日、1611年小倉で生涯を終えました。

## 2、セスペデスは何をしたのか？

セスペデスは1593年12月27日、文禄の役(壬申倭乱)のとき、朝鮮半島に密かに渡りました。時の太閤豊臣秀吉の命令により、朝鮮出兵を取りまとめることになった一番隊総大将、小西行長(洗礼名アグスティン)の依頼によってであります(ただし1587年の禁教令に背くため、秘密裏に行われました)。朝鮮出兵するキリシタン大名や武将達のためにミサを行い、告解を聞くためであります。これは豊臣秀吉像、朝鮮出兵出陣の名護屋城(佐賀県唐津市)、小西行長アグスティンと加藤清正(虎之助)の絵です。

## 3、セスペデスはどこに滞在したか？

彼は、レオ・コファン(またはファンカン・リャオ、下総生まれ、日本名不明)という修道士と共に、対馬、釜山経由で朝鮮半島に渡り、小西行長の預かる釜山近郊の熊川倭城(コムンガイ)に主に居住し、近隣の城にあるキリシタン大名や武将達の館を訪れていました。

セスペデスは、1593年末—95年初め頃まで、約一年間朝鮮に滞在したとされています。小西行長に乞われて、キリシタン武将達のミサや告解のため、朝鮮に渡ったが、小西の政敵、加藤清正(仏教徒)によって、秀吉に密告されたため、急遽帰国しなければならなくなりました。

## 4、セスペデスが行ったことは何か？

彼が朝鮮半島で行ったことは、以下のことです。

- ①戦争に参加した日本人キリシタン武将達との交流、ミサ、告解を聞くこと、
- ②イエズス会にあてた書簡を通しての朝鮮における戦争(文禄の役)の報告、であります。
- ③日本においては、朝鮮半島から連れ帰ってきた朝鮮人捕虜(2000人以上)に洗礼を施し、キリシタンにしました。
- ④捕虜の子供たちの一部はイエズス会の学校で信仰教育を受けました。後に日本やその他の国で布教活動し、殉教した者もいます。

従来の研究では、セスペデスは朝鮮で戦争中に捕虜や囚人と関わらず、彼らに直接布教していないと考えられていましたが、少なくとも以上のような朝鮮人捕虜との接点があったことが、朴哲博士の研究により明らか

にされています。

## 5、日本における文禄・慶長の役の遺産

優秀な朝鮮陶工を多く日本に連れてきたので、日本で朝鮮の影響を受けた陶磁器の生産が本格化しました。現在の九州の有名な陶磁器の窯（有田焼、薩摩焼など）の多くが、文禄・慶長の役の時の遺産です。ここでは、薩摩焼の沈壽官窯（九州薩摩で花開いた朝鮮陶磁器文化）を紹介します。

## 6、セスペデスの記録

セスペデスが残したものは、書簡を通じた文禄の役（壬辰倭乱）当時の貴重な記録であります。（特に日本準管区長ペドロ・ゴメス神父宛の書簡は、ルイス・デ・グスマンやルイス・フロイスの本で引用されています。）彼の書簡は現存しているうち、四通が朝鮮関係です。従来の研究では朝鮮関係の書簡は二通①②しか明らかではありませんでしたが、朴哲氏が③④を発見しました。

## 7、四通の書簡について

- ①ペドロ・ゴメス宛、1593年12月頃、熊川にて。朝鮮への旅の道中、対馬における布教活動の様子、熊川倭城に到着するまでの険しい道のり、戦争の和平交渉のプロセスについて。熊川倭城ほか、近隣の倭城の様子（これらの情報は、ペドロ・ゴメス『1594年イエズス会日本年報』1594年3月15日付け書簡、および、ルイス・デ・グスマン『東方布教史』で引用されています）。
- ②ペドロ・ゴメス宛、1594年1月頃、熊川にて。明との和平交渉後の小西行長の熊川倭城帰途後、九州のキリシタン武将達（小西行長、有馬晴信、大村純忠、五島純玄、松浦隆信、天草久種、栖本親高、小西与七郎、日比谷兵衛門など）との交流、特に対馬の宗義智との交流について。朝鮮の寒さ、飢えや病気で苦しむ日本兵の様子、秀吉への怒り、和平の見込みのないことへの不安などです。
- ③ペドロ・ゴメス宛、1594年2月7日、熊川にて。朝鮮での戦争の状況や、沈惟敬と小西行長アグスティンとの間の和平交渉について、また平和への関心（ルイス・フロイス未発表手稿の要約、アジュダ図書館所蔵）。
- ④ペドロ・ゴメス宛、1594年夏頃、熊川にて。雨期の朝鮮の気候、戦争の様子、黒田官兵衛シモンの城における布教活動、筑紫広門との交流が書かれています（これはフランシスコ・パシオの『1594年イエズス会日本年報』における要約でも引用されています。イエズス会ローマ文書館所蔵）。

## 8、なぜセスペデスを日本語訳したのか？

セスペデスは、フランシスコ・ザビエルやルイス・フロイスと同じように、16世紀の日本でのキリスト教布教に一役買った人物であります。しかし、セスペデスがどういう人物か、ほとんど知られておらず、16世紀のアジアでどんな役割を果たしたのかについても注目されていません。

日本におけるキリシタン研究は、イエズス会の研究を中心に一世紀以上行われてきましたし、翻訳書も多いです（例、フランシスコ・ザビエルの書簡集、松田毅一・川崎桃太訳のルイス・フロイスの『日本史』、村上直次郎訳『イエズス会士日本年報書簡集』など）。しかし、その中でもセスペデスに関する本格的な研究は皆無だった（村上直次郎博士が半世紀前に1585年のセスペデス書簡を一部翻訳したのみ）と言えます。

## 9、朴哲先生の研究が翻訳されるまで

16世紀に朝鮮半島に訪れた最初のヨーロッパ人であるにもかかわらず、しかも、日本史の重大な事件（秀吉の朝鮮出兵）が関わっているにもかかわらず、誰もセスペデスの残した記録に注目してこなかったし、彼について研究する研究者も（日本では）いなかったと思われまます。2013年の『セスペデス』日本語出版により、セスペデスの記録が初めて包括的に翻訳された事で、朝鮮出兵（文禄・慶長の役）に関わる記述について、明らかになったことがあります。それは、小西行長や九州のキリシタン大名、武将たちとの親交、小西行長と加藤清正のライバル関係、日本と明との和平交渉の様子、戦争の様子、日本兵の誰もがそもそも戦争に駆り出さ

れたくはなく、戦争に疲れていたことなど（秀吉の命令で仕方なく従軍した）といった従軍の様子です。

## 10、日韓交渉史を外から見る視点

朴哲博士の研究の特徴は、日本史と朝鮮史の双方と、日韓交渉史を、第三者である16世紀の西欧人が見るという視点を提供した点であります。つまり、戦争の加害者でもなく、被害者でもない、第三者のセスペデスが、双方に共感しつつ、事態を客観的に記録した事を明らかにした点であります。

## 11、セスペデスのアジアにおける意義とは何か？

セスペデスは日本を経由して朝鮮半島を訪れた初めての西欧人であります。彼が文禄・慶長の役（壬辰倭乱）や当時の朝鮮半島と日本との関係、または、朝鮮半島の事情を記録した、異文化接触や異文化交流の貴重な目撃者、記録者であった事を意味します。セスペデスは、日本と朝鮮半島におけるカトリック布教の歴史の一端を担う重要人物の一人です。セスペデスについて研究する事で、16世紀のスペイン、日本、朝鮮半島という国家間交流の輪や知られざる歴史が、セスペデスと彼をとりまく九州のキリシタン大名たちの親交から「ミクロヒストリー」として見えてきます。同時に、秀吉の朝鮮出兵とそれに対する当時の明、李氏朝鮮の対応といったグローバルな国際事情が、この「異文化の視点」を持つ記録者を通して見えてきます。訳者が関心を抱いた理由は、セスペデスが日本で活躍したにもかかわらず、日本の研究者に全く注目されていなかったからです。また、訳者がキリシタン文化に深い関係を持つ九州の天草出身だからです。セスペデスの書簡では、天草を含めた肥後南半を一時統治した小西行長アグスティンが頻りに登場します。セスペデスと小西は、とても信頼しあえる友人だったのです。

## 12、小西行長アグスティンと天草の歴史

1587年の秀吉の全国統一の際、九州征伐、特に肥後（現在の熊本）国人一揆の征伐により、小西は報賞として肥後南半を得ました。宇土城普請（建設）の際、協力を拒んだ天草五人衆を加藤清正虎之介（肥後北半を得る。日蓮宗徒で小西のライバル）とともに攻め、配下におきます。従って天草は一時小西行長の領土となります。天草は長崎とともに、当時、キリシタン文化のもっとも栄えた地の一つです。秀吉の全国統一以前に天草を支配していた五人衆たちが禁教令以前から次々にキリシタンに改宗し、教会堂も多く建てられ、信徒も数万人規模で存在しました。天草にはイエズス会により修練院（ノビシアード）や学林（コレジオ）、美術工芸学校も作られ、西洋式の教育が行われました。

## 13、小西行長と天草五人衆との関わりはどのようなものか？

セスペデスの書簡にでてくる小西配下のキリシタン大名たちは以下の通りです（有馬晴信、大村純忠、松浦、籠手田、宗義智、五島、平戸、黒田官兵衛、黒田長政、大友宗麟など）。

天草五人衆のうち、天草氏、大矢野種元ドン・ジャコベ、栖本通隆ドン・ジョアン、上津浦種直ドン・ホクロンなど、キリシタンに改宗した者も多く、小西とともに朝鮮に渡り、平安城（平壤）まで進軍しました。彼らについてはセスペデスの書簡に描かれています。河浦に日本最初のパイプオルガンが作成、演奏され、西欧文化が花開きました。最先端のゲーテンベルグ活版印刷機により、日本で初めての出版も行われました（平家物語やイソップ物語など日本と西欧の古典的著作や公教要理などの教本の印刷）。

1600年の関ヶ原合戦における小西行長の敗北と処刑とともに、五人衆もバラバラになります。大矢野氏は朝鮮出兵で直系が耐えます。1637年の天草・島原の乱の、キリシタン一揆軍の指導者、天草四郎時貞は、小西行長の家臣の末裔と言われています。一揆軍の敗北後、徳川幕府は鎖国し、スペインやポルトガルとの南蛮貿易は途絶えます。キリシタンも廃絶させられ、徹底的な宗教統制が行われ、寺による檀家制度が始まり、鎖国はペリーの黒船来航の幕末まで続きます（1857年）。

最後に、朴哲博士の『セスペデス』は、スペイン語と朝鮮韓国語版があるのに、日本語版が存在しませんでした。朝鮮出兵という日本と朝鮮の双方に関わる歴史なのに、日本人読者が読めないのは残念だと思っています。

した。ぜひ日本人にも読んでもらいたいと思い、日本語訳を行い、出版したわけです。両国間の過去の戦争は悲劇的だが、それによって被害を受け、廃れたものもある一方、双方の交流によって栄えた歴史もあります（日本と朝鮮半島の陶芸文化の交流史や、日本におけるキリシタン文化への朝鮮人の影響など）。セスペデスの第三者、中立者としての視点は、我々に次の事を教えてくれます。真の異文化理解や歴史理解のためには、中立的な視点が重要である、と。ご静聴ありがとうございました！

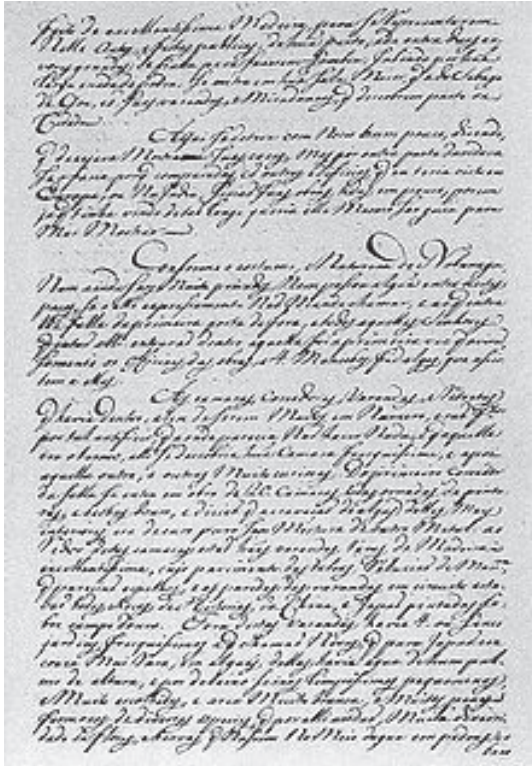


図1 セスペデスの書簡



図2 天草四郎陣中旗（天草キリシタン館蔵）

参考文献：朴哲著、谷口智子訳、『グレゴリオ・デ・セスペデス—スペイン人宣教師が見た朝鮮と文禄・慶長の役』、春風社、2013年。